

## 「余韻を残す」

本山布教教化部出版室長 蔵重宏昭

毎年本山では1月11日から31日まで恒例の寒行托鉢が実施されます。

「ギャーテー ギャーテー ハーラーギャーテー ハラソーギャーテー ボージーツワカー」(般若心経)と唱えながら鶴見の街を本山の修行僧が托鉢で練り歩く様は古くから地元で認知された冬の風物詩です。

十数名の托鉢姿の修行僧が街を往けば、期間中毎日のように浄財を喜捨して下さる方がたがあちこちにいらっしゃいます。それも、家の奥から駆け出さんばかりの勢いで。場合によっては駆けつけて追っかける方もいらっしゃいます。そうしたありがたい浄財を寒空の下「財法二施功德無量…」と唱えながら頂戴します。

そして本山の托鉢の特長は、最後尾の修行僧が手にゴミはさみを携え路上のゴミを片端から拾いながらついていくことです。これにより列の進むところ路上はキレイになる、ということですが担当者は延々拾うので骨の折れる作業、しかし黙々ときれいにしていく姿は尊いものです。

托鉢の列が通り過ぎた後は、施す側のふるまいや施される側のおこないによって素敵な余韻を残すのです。

「往ける者よ 往ける者よ 彼岸に往ける者よ 彼岸に全く往ける者よ さとりよ 幸あれ」(※中村元・紀野一義訳註・岩波文庫)が「ギャーテーギャーテー…」の日本語訳です。

托鉢僧の往く先々を彼岸へと変える、とでもいえましょうか。ここでいう「彼岸」とは死した後赴くところではなく、今生に現成させ得る世界のことです。

現成させるために為すことは人びとが共に善行を為し合うこと。善行とは理屈でいえば、自分のことはさておき他の為に、と為す行いですが、行いをいちいち論理的に判断するよりは、感性で捉えようとしたほうがわかりやすいのです。それこそ托鉢の通り過ぎた後の余韻。

善い行いによって醸し出された余韻は、縮みあがる様な寒さの中でも、温かみと爽やかさをもって味わうことが出来るのです。

いかなる場面においても善行の余韻を残す自身でありたいものです。